

論文内容の要旨

人間の認識というものは、さまざまな情報が組み合わされた構成体である。どのような情報からどのような認識が形成されるのかという問題にせまる鍵の1つは、文において、それぞれの語がどのように意味を構成するのか、その構成方法を明らかにすることである。それぞれの語は、何らかの情報を担うものであるが、語と語を統合することによって、文は、語が単独では持ちえなかった意味を持つことができるようになる。この博士論文は、日本語のいくつかの特徴的な機能語に注目して、それがどのように統合されたとき、語の持つ情報にどのような変容がもたらされるのかを解明するものである。

本博士論文では、文の意味を（モノとデキゴトを含む）個物の集合ととらえ、1つ1つの個物とは意味特性の集合であると仮定する。意味特性には、(i) その個物のカテゴリを表すもの、(ii) 別の個物との関係を表すもの、(iii) その個物のある側面についての度合いを表すもの、の3種があるが、特に難しいのが(iii)の「度合い」に関わる意味特性である。本博士論文では、度合いに関わる表現としてスギルとホドを取り上げ、これらの語によって「度合い」がどのように表示され、文の意味の構成にどのように関わるのかを考察する。

第1章では、本博士論文の理論的背景を説明する。本博士論文では、語と語を構成的に組み合わせることによって文の意味が生じるという生成文法の観点に立っているため、Computational Systemで構築された構造表示から意味の表示が導出される理論が必要である。もちろん、構造表示から読み取られる意味表示は、人間が文から理解する「意味」のすべてを表すものではない。統語構造が意味解釈の基盤をなすと仮定する限り、人間が文から理解する「意味」とは、構築された意味表示と話者の世界知識とをかけあわせて導出されるものだと考えるべきである。この観点に立つならば、「度合い」についても、(i) 語彙に直接指定されている場合、(ii) 文の構築の中で新たに作り出される場合、(iii) 構築された意味表示と話者の世界知識とをかけあわせて導出される場合の3つがあることになる。

具体的な分析を進めるためには、第1章で述べた理論的前提のほかに、日本語の統語構造についていくつか前提が必要である。第2章では、第3章以降で提案する分析の前提として、名詞句の構築方法、動詞句の構築方法、時制節の構築方法について説明する。

第3章では、スギルという語彙が持つ働きについて考察する。ここで注目するのは、「食べ過

ぎる」「買い過ぎる」など、スギルが動詞に接続する構文における解釈である。スギルという語彙が「過剰性」という意味特性を持つことは、ほぼ明らかであるが、問題は、どの個物のどの側面について「過剰性」があるという解釈が生まれるのかということである。「貼り過ぎる」という表現だけを見ると、「たくさん貼り過ぎる」という解釈しかないように思うかもしれないが「ポスターを雑に貼り過ぎた」ならば、1枚しか貼っていなくても「その貼り方が雑すぎた」という意味になり、「ポスターを高いところに貼り過ぎた」ならば、「ポスターを貼った場所が高過ぎた」という意味になる。このように、スギルの表す過剰性がどの個物のどの側面についての特性になるかは、単純な問題ではない。この現象については、記述はされてきたものの、従来の分析にはこのVスギル文の意味解釈がどのように得られるのかという仕組みを提案したものはない。本章では、スギルという語彙に指定されている意味特性が、構造構築の過程において、個物を表す語彙項目に加えられるという分析を提案する。Vスギル構文は、スギルが持つその「過剰性」の意味特性を、構造条件に基づいて選択した語彙項目に加えることによって「度合い」を表すものである。

第4章では、たとえば「食べるほど太る」など、前件の度合いに応じて後件の度合いも増すという解釈になる比較相関構文のホドが持つ働きについて考察する。比較相関構文において相関的解釈が生じるのは、動詞についてだけではない。「ポスターを高いところに貼るほど見えにくくなる」ならば、「ポスターを貼った高さに応じて見えにくさも増す」という解釈が可能である。本博士論文では、この比較相関構文の意味解釈についても、どのように得られるのかという仕組みを提案した。本章で示したのは、比較相関構文のホドが、構造構築の過程において、相関的解釈に関わる個物を表す語彙項目を前件と後件からそれぞれ1つずつ選択したうえで、選択された語彙項目についてそれぞれグループを作り出すという分析である。比較相関構文のホドは、その後件のグループのメンバーと前件のグループのメンバーを関連付けることによって、「度合い」を表すものである。

第5章では、たとえば「驚くほど大きな仏像を作った」のように、前件で後件の何らかの程度を表す構文のホドが持つ働きについて考察する。このような、程度のホドは、構造構築の過程において、後件のデキゴトに対して前件のデキゴトを参照させる意味表示を作る。本博士論文においては、程度のホド構文では、この参照されるデキゴトを順序集合の中に位置づける理解が生じることで、「度合い」を表すという分析を主張する。これは、構築された意味表示と世界知識を合わせて順序集合を作り、「度合い」を表すものである。

第6章では、本論文の提案をまとめ、今後の課題を提示した。

冒頭で述べたように、生成文法の立場に基づくと、「度合い」には(i) 語彙に直接指定されている場合、(ii) 文の構築の中で新たに作り出される場合、(iii) 構築された意味表示と話者の世界知識とをかけあわせて導出される場合の3つがあると考えるのが妥当であり、(iii)は言語機能(すなわち、LexiconとComputational System)ではなく、推論一般についての仕組みにゆだねられるべき働きである。本博士論文では、(iii)を峻別することによって、(i),(ii)の仕組みが簡明になり、かつ、よりよく現象を説明できるということを示した。その結果、(iii)は、より一般的な特性として切り出されることになり、本論文は、生成文法の理論に基づいて、人間が「度合い」をどのように理解しているのかということを示唆することになる。